
双銃魔弾エルド

成金歩兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双銃魔弾エルド

【Nコード】

N8894S

【作者名】

成金歩兵

【あらすじ】

「封印の氷刀と契約の魔剣」のサイドストーリーとなる作品です。この作品は外伝作品となりますが、本編とほぼ同時進行でがんばりますので、応援してください！

ある日突然、魔弾の二つ名を持つ傭兵、エルドデイスティは異世界に飛ばされる事に!?

※話が進むとあらすじも増えるかも

第一話 異世界の傭兵（前書き）

天神烈火です

お初の方は始めまして！

本編からの人はお久しぶりです
では、どうぞ！

第一話 異世界の傭兵

この世界には魔装具パーツと言うものが存在する

魔力を魔装具に流し込む事により、ネックレスや指輪、ブレスレット、他にはチェーンなどなどのアクセサリーを剣や槍などの武器本来の姿に戻す事ができる便利な物である

その武器にも、魔力を流し込む事で、本来の力を使う事ができる例を挙げると・・・銃などで、銃は極端だが、実弾はなく、魔力を弾丸に変えた魔弾を打ち出すと言う原理である。

〓とある町の小さなギルド〓

ギルド、それは傭兵達が集う場、そこでは貼り出されている傭兵募集のビラや大型モンスターの討伐依頼などは張られた掲示板や食事を行う酒場などがある場・・・

そこに蒼いバンダナをしたとある傭兵がカウンターに座っていた居た・・・

「おい、見ろよあれって魔弾じゃねえか」「ああ、あのバンダナだとすれば奴だな」「魔弾は相変わらず一人で居やがる」「奴も傭兵なら、仲間の一人ぐらい居ないもんかね」「噂じゃあ、唯一の家族とあの魔剣士を殺ったやしいぜ」「俺は逃げられたって聞いたけどな」「俺は狩ろうとした奴に・・・」

周りからは彼の善くない噂ばかり、彼は現最強の傭兵、異名は魔弾、本名はあまり知られていない・・・

数年前までは彼の名を知る人も多く居たのだが、ある出来事によりその者たちは死んでいった。

ギルドの登録記録によると、彼の名前はエルド・デイスティ、使用する魔装具は銃、二丁装備しているが、その内の一丁が特殊な加工を施した拳銃にしては大きすぎる物で、普通の拳銃の二倍、もしか

するとそれ以上かもしれない、片方は自動式拳銃を使用、もう片方は大型の回転式拳銃となっている。

五月蠅い、とてつもなく周りからの雑音が多すぎる・・・魔弾がどうのこうのはどうでもいい

「落ち着いて酒の飲めやしない」

独り言の様に呟く、実際は独り言だ・・・仲間やら昔は居た・・・十分すぎるほどにだ・・・ある事をきっかけに多くのやつらが去っていった・・・あの二人は別としてだがな

俺は一人、現在での話はなしになるがな

最強とはよく言ったものだ・・・人一人守れないようじゃ話にならない、強いどうのこうのじゃなくて守りたいものを守るかどうかだもう一度、一瞬でもいい、あいつ等に会いたい、そして謝りたい・・・

エルドは酒の入ったグラスを傾け、一人孤独にカウンターに座る・・・その周りには誰も居ない、他の傭兵は彼を避け、関わろうとしない・・・

・
・
・

「た、大変だー！街に奴らが、モンスターが、進入してきたー」
一人の男性がギルド内へと慌てて駆け込み、そう叫んだ・・・

（は？なんでモンスターが街に？・・・まあ、俺にはどうでもいいさ、さっさとこの街を出るか）

騒がしくなるギルド内、それに乗じてエルドはマントに身を包み、気づかれること無くギルドを出た・・・

「こ、こうなったら魔弾にでも頼んで・・・って、奴は何所に行った」「さっき誰かが出ていたが、まさかそいつが魔弾か！」「あの野郎、真っ先に逃げ出しやがった」

まるで人事のようにギルド内に居る傭兵は他人に押し付けようとする

るものの、その頼みの綱が居なくなったことにより、よりいつそ混乱し始めた・・・この光景を住民が見たらどう思うことか、いくら傭兵が自由な奴らばかりとはいえ厭きれるばかりの光景だった

・
・
・

エルドはギルドを出て、街を見てみるとそこはすでに火の海だった・・・そこには多くのモンスターと燃えて崩れ去ってゆく街の光景でいっぱいだった・・・

「こりゃ、街というより死地だな・・・傭兵としては気が乗らないが、ちよつと遊んでいこうかな」

そう言うのと彼の左手の中指にされていた指輪が光り、そして左手には自動式拳銃のブレン・テンが握られて、指輪が消えていた

「ゴオオオオ・・・」

「いきなり、ボスのお出ましか」

やや離れた所から翼の生えた巨大な人型のモンスターが飛んできた・・・その姿はまさしくガーゴイル・・・ガーゴイルでも、上級に位置する種類の奴が飛んできた

「こんだけ広い街なのにいきなりコイツに見つかるとは、とことんついてないようだな」

ガーゴイルは空中で何かの動作を始めた・・・

「一撃だ・・・一撃で仕留める・・・」

エルドはガーゴイルに銃を向け、魔力を籠め始める・・・だが、その間にもガーゴイルは何かをしている・・・まるで、魔方陣を組むように

（奴は一体何をしている・・・モンスターは魔法なんて使えるはずが・・・いや待てよ、年に数回そんなことをするモンスターが出るって噂で・・・そうか、あいつ等もそれで！）

一瞬だが、エルドの気が反れた・・・その瞬間だった、ガーゴイルは魔方陣を完成させ、その強大な魔力で、鉄球のような魔力の塊を

創り、その攻撃を放った・・・

「ッ・・・はあああああ！・・・一発イテッやつをお見舞いしてやるよ！」

ズバーーン、エルドの銃からは考えもつかないほどの魔弾が放たれた・・・そう、二つ名の由来はここから来ているのだ・・・

そのときの事だった、ガーゴイルの放ったその強大な魔力とエルドの放った魔弾がぶつかり合った瞬間事だった・・・次元の扉が開いた・・・あの時の様に、次元の扉が・・・その瞬間、ガーゴイルは去っていった、と言うより、もうすでに居なかった・・・

（やばい、吸い込まれる）

だが、すでに遅し、エルドは次元の扉へと消えていった・・・

第一話 異世界の傭兵（後書き）

どうでしたか？

誤字等は教えてください！

この話は本編の「異世界の傭兵」と同じなので、カチンときた人にはすみません

第二話 飛ばされた異世界先の戦い（前書き）

がんばって投稿させていただきますい！

第二話 飛ばされた異世界先の戦い

異世界・・・それは俺でも少しは知っている

次元学についてはよくは知らないが、年に数回、次元の扉が開くと言うこと・・・まさにさっきのように

「あ、あれ？ここは・・・何所だ？」

気づけばそこは草むら、見る限りは少し行った所に広がる荒野・・・そして、戦場？

「あれ？バンダナが無い・・・それに俺の銃も！って、それは指輪に戻ってたか」その辺りを見渡すと「あった、あった」エルドは頭にバンダナをつけた

「さてと、どうしよっかな」

あの戦場に行けばいい雇い主が見つかるかもしれないけど、敵と認識されて殺されそうだしな

「なんか、片方の軍が圧されて・・・こっちに退いてくる・・・よし！隠れよう！」

エルドはその場から離れ、少し離れた草むらに身を潜めた

＼ユナリア軍＼

「全軍退けー！一度退却して大勢を立て直す」

そう、草むらに退いて行くのはユナリア軍、帝国軍に攻め込まれ、最終防衛ラインまでもが突破されようとしているこの状況、指揮を取るのはスクレイド・レメル、ユナリア第四騎士団の隊長にして、最年少の騎士団の隊長

（こちらと相手の戦力差が大きすぎる・・・一発、一発でこの形勢を逆転させる方法はないのか）

そう、退却しながら思うスクレイドだった

・ ・ ・

「敵は今、我々が退いた事により補給を行っているとところだ、敵との距離もそれなりにある、全軍負傷した者の手当てをし、大勢を立て直せ」

ユナリア軍は負傷者の手当てに取り掛かる

（こんな状況で、攻撃なんてされでもしたら・・・壊滅、ここで我々が敗ればユナリアを守る者がいなくなる、何とかしなければならぬ）

「エルド・デイスティ」

「へー壊滅寸前ね、面白そうじゃないの・・・飛び入り参加はOKだよな」

草むらでユナリア軍を見ながらそう言うエルド・・・妙に嬉しそうに見える

「なら、あれを用意するか」

エルドはポケットから5つほど同じ指輪を取り出し、それが小型の大砲に変わった

「お、敵さんのおでましだ」

少し離れた荒野から、敵軍が動き始める

「なんか、敵数がああ軍の5倍はあるんですけど・・・ま、気にするほどの数じゃないしっか、ざっと千人程度だし」

他人が聞けば絶対にどん引きされそうなことを平気に言った

いや、別に天然じゃないからな、前にも似たような感じで戦った事ぐらいある訳だし、それを思えば気がまぎれると言うかなんと言うか・・・

くユナリア軍く

「スクレイド様、敵が動き始めました」

「思ったよりは早いな、我が軍の状況は」

「それがまだ」

一人の部下は残念そうな顔で答えた・・・それも無理も無い話だろう

「そうか・・・よし！全軍に告ぐ、お前らここで待機！俺一人で相手してくる」

『ええエーーーーー！』

でたな、全員一致のびっくりマーク

「伊達にこの年で騎士隊長つとめてないよ」

「で、ですが、いくらなんでも無謀すぎます」

「安心しろ、俺一人と言っても俺にはコイツが付いている」

スクレイドは右手の甲に刻まれた紋章を見せ、スクレイドの背後にゴーレムが現れた

「グウオオオオオオ！」

『オオ』

「最後の切り札って奴だよ、いくぞゴーレム！」

ドスドスドスそうゴーレムの足音とスタスタという音と共に一人の騎士と一体のゴーレムが戦場へと消えていった

くエルドく

「なんだありゃ、ここは異世界ってことは分かるが、人がモンスターを従えているのか？だが、ほとんどの奴らにはモンスターなんぞ付いちゃいない、一部の奴らだけが従えられるのか？」

始めてみる光景にしてはいい観察力をしていると誉めるべきなのだろう、草むらから一人の騎士がゴーレムを連れてでてきたのだ

「だが、たった一人でか・・・隊長か何かか、それとも自信過剰の馬鹿かどちらかだよな・・・まあ、俺は俺の考えで戦うとしよう」

エルドは左手の指輪を銃に変えて戦闘準備をした

「もう少し、もう少しだ・・・射程距離内に入るまで50・・・
・・・30・・・10・・・3、2、
1、今だ！」

ドン、ドン、ドドン、ドン！

くスクレイドく

ドン！ドン！ドドン！ドン！

「なんだ？」

ドカーーーーン！ドカドカーーーーン！前方の帝国軍が砲撃された・・・
何所から？

「一体誰が、俺の部隊には砲術士なんて居ない、じゃあ誰が」

ドン！ドドン！ドン！ドドン！鳴り響く砲撃音、それはかなり近い、
だが姿は無い

ズカーーーーン！ドカーーーーン！あれは砲弾と言うより魔弾、魔力の塊
の玉が敵を襲う

「これはチャンスだ、誰かは知らんが感謝する、いいかゴーレム、
砲撃が終わり次第、突貫する」

「ゴォォ」

その後も止む事の無い砲撃・・・その間に俺は自分の部隊に戦闘準備
をさせた

「いいか、誰が砲撃しているかは分からんが、今がチャンスと言う
事には変わらない、よって砲撃が止み次第・・・総攻撃だ！」

その後は帝国軍の約3分の2が砲撃によってやられたところにやっと、
砲撃が止んだ・・・

「いくぞ！」

『おーーーーー!』

くエルドく

「ハア、ハア、はあく、さすがにあの量は撃ちすぎだな・・・」
撃ちすぎというのは、あれが全部魔弾って所に関係している・・・
簡単にいうと、魔力の使いすぎで、それが体力にも影響を及ぼした
と言う事だ

「休んでる暇は無いが、少しここで休むでしょう」
エルドは大砲をしまい、その場で眠りについた

くスクレイドく

「進め! 一兵たりとも生きて逃すな!」
『おーーーーー!』

ユナリア軍の騎士たちは一気に攻撃を掛ける

・
・
・

結果として勝利を治めた・・・だが、一つ気になる事があった、それは

「なあ、あの砲撃って誰がやったと思う」

「我々は負傷者の治療に追われていましたので、誰がやったのかは
分かりません」

「あれからそう時間も経っていないし、少し探してみなか、あれは
相当の魔力の量だから、一人でやったとすれば、そこら辺でぶっ倒
れてるかもよ」

「なぜに、一人だと分かるんですか?」

「今の世界じゃあ、単独じゃない限りほとんどの奴らが帝国軍に手を貸すと思わないか？」

「それは確かに」

「それじゃあ、全軍に告ぐ、砲撃を行った場所周辺を探索しろ、砲撃を行ったと思わしき人物を探せ！」

『おおー！』

「いましたー」

あっけなかった・・・もうすこし掛かると思ってたんだが

「青いバンダナ・・・こいつが？」

「他に誰もいませんよ」

「俺とそう変わらない、年に見えるんだがどっからどう見ても、かなり若い・・・」

「ふぁ~~~~、よく寝た・・・あんた等誰」

あ、起きた

「先ほどの戦では助かった、感謝する」

「あゝ、あれな気にするな、俺はただ、雇い主を捜しているだけだし」

「傭兵か？」「そりゃそうだろ」

「これまた、気まぐれは傭兵が居たもんだな」

「悪かったな気まぐれで、異世界に飛ばされて、目が覚めたら戦場だったから雇い主捜しにはちょうどよかっただけだし」

「おまえ、異世界の人間か！」

「だから、そういうt「行く場所が無いなら俺らと来いよ！」・・・マジ？」

「マジだマジ、オオマジだ、傭兵なら金さえ払えば文句ないよな！」

「職と、食事と雨風しのげる場所さいあれば金は無くてもいい」

「姫様はお優しい方だから、この成果を報告すれば雇ってくれるよ」

「それじゃあ、よろしくな」

「ああ」

第二話 飛ばされた異世界先の戦い（後書き）

誤字等がある場合、教えてください！

第三話 優しき姫の下に残る者達と加わる者（前書き）

GWを活用して執筆活動を行っている天神烈火です。
今回はがんばりましたから、それなりに読みごたえありますよ！

第三話 優しき姫の下に残る者達と加わる者

今はあの戦いの翌日・・・軍の大移動、それも激戦のあとなので、兵にも負担を掛ける事もできず、一度、野宿して翌日の朝に城に到着したという訳・・・

現在俺は、膝を付いた状態で頭を下げている・・・なんでかって？それはスクレイドが昨日の事を姫様に報告した所、その者に会いたいと言ったそうで、こうしている訳で・・・

「顔を上げてください」

「はっ！」

姫様の声だろうか、そう言われるがままに顔を上げると・・・そこには薄い黄色と言った方が近いのだろうか、それはとても美しく、清潔感に溢れる髪質のロングヘアーに吸い込まれそうなくらい、綺麗で、純粹さに満ち溢れる目をした・・・あれは少女と言った方がいいのだろうか・・・14、15あたりの少女が座っている・・・しかも、本来は国王が座っているはずの所に・・・つまり、国王様？「始めまして、私はアニア・ネールス・ユナリア、ここ周辺の領主をさせて頂いています」

「お初にお目に係れて光栄に思います、俺の名をエルド・ディステイと申します」

「そう、堅苦しくならないでください、こちらも話しにくいですし」ニツコリと笑いながら、この場の緊張を解すかのよう^{ほぐ}にそう言った「は、はあ、分かった」

なぜだろう、俺がそう言った瞬間、とてつもなく痛い視線が刺さった・・・その痛い視線は姫様の側に立つ若い女騎士からだった・・・あれ？あの子、手が震えてる？そして、なぜに腰に差している剣に手を伸ばそうとしているんだ！

「レキ、やめなさい、貴方が私のために思ってくれているのは嬉しいのですが、私がそうするように言ったのです」

「申し訳ございません」

部下を従える身としては合格だな、信頼の厚い王は部下を扱いやすい、だが、若さゆえの経験不足もあるようだな・・・

「信頼が厚いんですね」

「それは、私が幼い頃から付いてくれている者ですから」

優しい、優し過ぎるほどに優しい・・・

「では、本題に戻りましょう・・・先日での戦いでの援護を感謝いたします」

「そんな、感謝されるほの事はなにも」

少し照れくさく答える

「謙遜しないでください、貴方のおかげで勝利する事ができたのですから、それに貴方は異世界の人だと聞きました、なぜ私たちの味方をしてくださったのですか？」

「飛ばされてきて、そこが戦場で、壊滅寸前の軍を見て、加勢しようとしたって理由じゃ納得いきませんか？」

「お優しい方なのですね」

クスリと笑いながら答えてくれた

「傭兵ならば何所の軍についても文句は言われないでしょ」

「それもそうですね、では、少しの間は私たちに協力してくれるんですか？」

「俺の気が変わらない限り、食事と寝床さえ提供してくれるのなら、いくらでも協力すると誓いますよ」

「本当ですか!？」

「その返事は雇って貰えるとお受け取りしてよろしいですか？」

「もちろんです! レキ、エルドさんのお部屋を用意して」

姫様はパーっと笑顔になり、嬉しそうにレキと言う若い女騎士にそう言った

「御意」

「スクレイド、この城をエルドさんに案内して差し上げて、それから今の国の現状と国の説明も!」

「はっ！」

・
・
・

「よかったな、エルド」

「ああ、本当にお優しい姫様だな」

現在、俺はスクレイドに連れられ城を回っている所だ・・・

「お優しいだけならまだいい方だよ」

「人がいいから付け込みやすいって事だろ」

「それにまだ若い、成人にもなっていないというのに」

「一つ気になっていたんだが、姫様ってお歳はいくつになる」

「たしか・・・14だっけか」

「それはちよとばかり若すぎないか？」

「そうなんだよ、別に姫様が悪いわけじゃないんだが、先代の王が病気で倒れて姫様が代理をやっているのだが、それをいいことに帝国側に寝返った者もいれば逃げ出した者などがいたよ・・・」

深刻な顔でそう話すスクレイド、余程敗戦を繰り返してきたのか、顔には疲労とストレスが溜まっているように見える

「なるほどな、若さゆえに不安がある訳だな、それで兵力も小さければ、家臣もろくに居ないってことか・・・深刻な問題だな」

「ああ、ここに残るこの達は俺が信頼を置く第4騎士団とレキの親衛隊ってところだな」

「少ないな」「だから、お前を雇ったんだよ、今の戦況じゃあ独立もできないしな」

「独立？」ここは国じゃないのか？とすると一体・・・

「いまからその説明をするから、入れ」

「あ、ああ」

二人はある部屋に入った・・・そこは書庫に近い所で、多くの書物や資料、それに大陸の地図と思わしき物まで置いてあった・・・

「それじゃあ説明するぞ」「頼む」

机に大陸地図を広げ、俺とスクレイドは椅子に座った・・・

「まずは、現時点はここ、北ナドラ中立国って所の下辺りがこの城、その下はセントリナ領、そのまた下はナドラ連合の領地、この大陸の東にあるのがギニマドラ帝国、大陸の約半分はその手に落ちたよ、つい最近まではこの東側にはやや小さかったけど魔族国バルマスが在ったんだが、帝国軍に落ちた、逆の西にはグラナ王国があつて、それ以外は中立の国」

「大体は分かった・・・一つ聞くがさっき独立がどうのこうのって言っていたが、それは一体どう言う事だ？」

「あゝ、それな、元はユナリアも列記とした中立国だったんだけど、8年前だったけかな、それぐらいの時期にナドラ連合が急激に力をつけてな、その勢いで吸収された」

「普通は吸収なんてされるはずは絶対じゃないはずんだけどな、国家の力ってそこまで弱いとは考えにくい、だとすれば不景気とかかな・・・」

「今の戦局を説明するぞ」

「ああ」

「今は帝国の矛先が北ナドラに集中してだな、北ナドラの本拠地も攻撃を受けているらしく、壊滅寸前だそうで他のナドラ連合も見放している状態、北ナドラ本部が上手いこと言って矛先をユナリアに向けやがったおかげでこの有様よ、そのことに対し姫様は仕方ないとうけいれた結果が今の現状」

「・・・悲しい・・・悲しすぎる話だなおい、何所まで純粹なんだ、姫様は・・・」

「ここに残った家臣一同は最後まで姫様とこの国を守り通し、ユナリア国再興を目出す所存だ」

「それを聞いて、ますます協力しなくなっちゃったよ・・・魔弾とまで言われた俺の力を思う存分見せ付けてやるよ」

「頼んだぜ」

「言われなくとも」

その後、俺はスクレイドに色々なことを聞いた・・・この世界の原理、次元学の事、この世界にも魔装具はあるかどうか等々、様々なことを聞いた・・・結果としてはこの世界には魔装具はあるが、呼び方が違っただけで、原理は同じだった・・・どうやら魔装具はパーツではなくピースと呼ぶらしい

ガチャ・・・ん？

「やはりここに居たか、部屋の準備ができた付いて来い」
そこに入ってきたのはレキと言う者だった

「ずいぶんと時間がかかったな」

スクレイドがそう言う・・・言われてみればそうかもしれない

「探すのに時間がかかったただけだ」

そう言われてみれば、やや息切れをしている気がする・・・かな・・・

「行くぞ」

「へーい」「って、お前も来るのか？」「いいじゃん、ここまで説明したんだしさ、それぐらいいいじゃんかよ」「まあ、そうだけだよ」

・
・
・

「お前の部屋はここだ、お前は一応傭兵ではあるが、姫様の命により客将として扱えだとのことだ」

「ふーん、いいセンスの部屋だな」「なんでお前が感想を述べてるんだ」

感想を述べたのは俺ではなくスクレイドだった・・・よって俺とレキによってツツコまれる

「まあ、確かに豪華な部屋だな」「洗面所、風呂やトイレなどもあ

るから勝手に使え」

へいへい、愛想の無い奴だこつて

「それから、えーと・・・そこのお前！私と勝負しろ！」

「は？・・・と言うより、名前を覚えろ！エルドだエルド・デイス
ティだ！えーつと・・・レキさん」

とりあえず名前を覚えなさい、勝負どうのこうの・・・勝負！？

「お前こそ私の名前を言えてないではないか」

「名乗られてなきゃ知らないのも当たり前だろ」

「それは俺が説明しよう、コイツはレキ、レキ・イヴェール、姫様の親衛隊長を務めている奴でな、剣を使わせたら達人並みで、人一倍短気うえに凶暴、噂じゃあツンド「イラン事をベラベラ喋るな！」
ゴハアアツ」

まあ、あれ以上言われるのも本人が黙ったままではないだろう・・・
自業自得なのだが、すごいな、一瞬で回し蹴りされたぞ・・・多分、
避けようとしても当たるぞ、あの距離はキツイわな

「で、勝負はもちろん受けて立つわよね」

ギロツ、思いつきり睨まれたぞ、怖い、怖すぎるよ、もし断りでも
したら、回し蹴りだな・・・

「じゃあ、なんで俺なんかに勝負を挑もうとするわけ？」

「そんな理由か・・・簡単な事だ、お前からは危険な臭いがする」

「そんな、臭いはしないけどな、クンクンクン」そういう意味では
ないわー！」ゴハアアアツ」

復活ハヤッ、そしてまともやノックダウンか！恐ろしいな回し蹴り

「お前、避けたな」

まあ、今のは俺共々蹴られそうだったけど、今のはまぐれだろ

「危険ねー、それってレキさんにも（ブン！）おっと、問答無用だ
な」

「私を侮辱する事は許さん！」

とっても自己中心的な子だった！おーい、なんかウゼーよコイツな
んだよ

「分かった、分かった、相手してやるよ」

「言ったな、勝負は三十分後、中庭でだ」

スタスタスタ、レキはその場から、去っていった・・・あ

「大丈夫か？」

「なんとか」

スクレイドは立ち上がり・・・ボキボキボキ、どんだけ間接鳴らしてんだよって思うぐらい鳴らした

「あゝあ、勝負を受けちゃったか」

むっちゃあきれた顔をしている上に疲れた顔をしている

「レキの奴、変な所で向きになるからなく、弟とは大違いだな」

「弟居るんだ・・・」

「居るよ、今はセントリナ学園にいつてるんけどな」

「セントリナ学園？」

「それはまた今度説明するわ、とりあえず今は勝負するんだろ」

「正確には勝負させられるんだけどな」

「そりゃそうか」

「そうだよ、傭兵は自由に受ける仕事を選ぶけど、自分から意味も無く人を傷つけるなんてのは規則としてもってはいけないことなんだよ」

「プライベートと仕事はハッキリと分かれてるわけだな」

「そういうこと」

「それはさて置き、そろそろ行ったほうがいいんじゃない？」

「そうだな、そろそろかな」

そう言い、男二人は中庭に向かうのだった・・・

第三話 優しき姫の下に残る者達と加わる者（後書き）

どうでしたか？

誤字等は教えてください

第四話 満月の夜に響き渡る音色

現在俺は中庭に居る・・・

つまりは勝負・・・もう少し言うと、レキと言う、姫様の親衛隊長との一騎打ちだ・・・

てか・・・なんでこんなにも人が居るの？なんで？ねえ、なんで？

「噂が広がるのってこんなに早いのか？」

「いや、多分だが・・・レキが大声でさっき叫んだからじゃないか」スクレイドの意見に同意・・・まあ、あんな大声で言ってきたら他の奴にも聞こえるわな・・・

中庭の周りには多くのユナリア軍の兵士や、恐らく姫様の侍女の人たち、簡単に言えばメイドさんだな、まあなんにせよ、多くの人たちが観戦に来ていた・・・中には賭けをしている人が居る・・・

「どっちが勝つと思う」「俺はレキ隊長だと思うぞ」「それじゃあ

俺はあの傭兵に銅貨3枚」「俺はレキ隊長に銅貨5枚だ」「ワシは

レキ殿に銅貨2枚だ」「それならオレツチは傭兵に銀貨1枚」

大きく出たな、それじゃあレキ様に銀貨一枚」・・・賭けるな！見世物じゃねーぞ！

「まあ、少なくともお前の力を見せ付けられるいい機会じゃないのか？」

「それもそうだな」

それもそうだ・・・昨日の戦いでは援護砲撃しかしておらず、実際に近接戦闘はしてはいないのだから・・・正直な所、近接戦闘は得意か不得意かと言うと不得意で、持っている魔装具の中にも念の為にと思いい剣が一本とダガーは二本、ナイフが八本式のセットになった物が一つだけ、他の物は小型大砲だったり、拳銃だったり、後は・・・銃火器にチェーン、他は生活に必要な物と言った所だな、何でそんなに持つてるかと言うと、旅をしている内にどんどん増えていった・・・第一に魔装具は持ち運びが楽だから別に困らない、皮袋にでも全部入るぐらいだし

「お前って、近接戦闘なんてできるのか？」

「その質問の答えはできないって答えておくよ、できない事も無いけど、中距離の方が得意だ」

「それはきついと思うぞ、さっきも言ったけどレキは剣を使わせれば達人並みだし」

「まあ、どうにかなるさ」

まあ、ここで負けるようじゃあ、傭兵の名が廃れるてるっての

「待たせたな」

相手さんのお出ましたよ・・・

「で、得物の指定は？」

「無い、無条件、無制限の一騎打ちを申し込む、判定はスクレイドに任せる」

「へいへい、やりやいいんだろ」

めんどくさそうに、引き受けるスクレイド・・・審判くらいはしっかりやれよ

「それじゃあ、両者ともに準備はいいか？」

「こちらはいつでもかまわん」

「・・・よし！いつでもいいぜ」

オレは両手の指に魔装具の指輪を、腰にはチェーンを、そして右腕の首に一つのリングを通したチェーンをし、準備が整った状態で答える

「それでは・・・始め！！」

その瞬間の事だ・・・約10メートルもの距離があったのにも関わらず、レキは正面から一気に攻め込んできた・・・そして・・・

「ていや——！！」

速い、今のは走り出してから切り込むまでが約2秒、いや、それ以下か、まあいい

俺は右斜め上に切り込んできたのを、避け、相手の左側へ回りこむ・

「速いな」

「隙だらけだぞ！」

レキは体を捻り、そして、剣の方向を変え、俺を突き刺すように攻撃してくる

だが、俺は・・・

ガギイイ・・・それは剣と剣とがぶつかり合う音・・・

俺はとっさにダガーを取り出し応戦をする

「ほう、少しはできるようだな」

「当たり前だ」

俺は後ろに下がり、体勢を立て直し、ダガーを仕舞う

「それなら、これはどうだ！」

次の瞬間だ、また一瞬で接近してきた・・・そして・・・

「神速連槍！」

と、叫んだ瞬間の事だった！レキが構えた剣は目にも留まらぬ速度で連続で剣を突きつけてくる・・・例えるなら槍といった所だろうシュ！シュ！シュ！シュ！レキの突きつけ来る剣はすべて俺は避けている・・・と言っても紙一重で後ろに下がりながらなのだがな「アイツ一体、何の者だ！？」「レキ隊長の神速連槍を避けるなんて」「まるで化け物だな」

そう周りからの声が聞こえてくる・・・

「この！この！この！このー！」

は、厭きれる・・・ワンパターンすぎる・・・それに、目が慣れしてきた

突き刺してくる場所も差ほど変わらない、そろそろ茶番は終わりにしようかな

ギイイ・・・今度はナイフを一本取り出し、剣を受け止める

「まだやる気か？」

「なッ！・・・」

ガキン！俺は剣をナイフで掃い、急いで距離をとるためにバックステップをとる

「・・・る・・・い・・・うるさい！」

彼女は剣を振るい、特攻を掛けて来た・・・そして・・・ガギインッ！彼女が持っていた剣は彼のナイフに跳ね飛ばされ、地面に突き刺さった・・・

「そこまで！この勝負、エルド・ディスティの勝ち！」

その瞬間、観戦していた者達から歓声が上がった・・・

「言っただぞ、冷静さに欠けるものは戦場で真っ先に死ぬと」
ガヤガヤと五月蠅いその場で小さく呟いた・・・

「仲間割れはダメ——！」

は？その場が今の今まで五月蠅かったのに、一人の少女の声で一瞬にしてピタッと静まった・・・
その声をかけたのはその城の姫・・・アニア・ネールス・ユナリアに他ならなかった・・・

「レキ！エルドさんになんて失礼な事してるの！」

「も、申し訳ございません！」

怒鳴られる、レキ・・・年の差的是ありえない事なのだが、この場合は上下関係と言うものにおいては姫様のほうが上司にあたるものな

「エルドさん、すみません・・・何と言ってお詫びを申し上げたらいいのか」

「いえ、とんでも御座いません、今行われたのはレキ殿が俺自身の力量を試すとお言いになられたので、俺がその勝負をお受けしたまでの事、別にレキ殿には悪気は無いのでこの件は俺の責任と言う事でどんな罪もお受けいたしましょう」

俺はまったく慣れない敬語を使い、丁寧に説明をする・・・いや、したつもりだ！

「そうなのですか？」「はい、寧ろまだ俺が信用できない者が居るかもしれないと思いとレキ殿の提案で人目に立つこの場所を選んでくれ事には感謝するぐらいです」

「そう、ですか・・・レキ」「はっ」「さつきはごめんなさい」「滅相も御座いません」

「エルドさんは客将としてここに迎え入れているので、罪は掛けられません。ですから、この件は無かった事にします」

よかった・・・これで一件落着だな

「皆、自分の持ち場に戻って仕事しなさい！」

『はっ！』

そう言われた瞬間に全員が戻っていった・・・

そして、姫様も戻っていった・・・

「その、なんだ、すまなかったな」

「冷静さに欠けたやつに冷静な判断はできない、だとすればこうなったことは想定外だろうな」

「エルド、それは事実でも少し言いすぎだろ」

「いや、元は私が悪いんだ、それに私が悪いのに結果としてはその、お前の責任になってしまったし」

「別に俺は気にしていない、それじゃあ、俺は部屋に戻る」

スタスタと彼はその場に二人残して去って行った・・・

「多分だが、エルドがあそこまでお節介^{せっかい}で、キツイ言い方をするのは、不器用だが他人を守りたいからだ俺は思う」

「今、アイツの言った事が分かった気がする」

・
・
・

その夜の事だ、その日の夜は昨日の勝利を祝おうと姫様が宴会を開いた・・・聞く所によると勝利したのはかなり久しぶりだとかで、皆喜んでいた・・・飲めや歌えやの大騒ぎ、相当嬉しいらしい

そんななか、俺は一人、部屋に居た・・・なぜかって？

それは、人との関りを今までそう多く持った事が無いからだ

それに「♪~~~~」俺にはコイツがある

彼が手にしているのはギター・・・音色に魔力を込めて弾くと心がやすらぐ・・・

「今日は満月か・・・」

彼はギターを弾きながらそう呟く、自分にもどうして一人で居たがるのかは分らない、だが、こうしてる方が落ち着く、それに、新参者の俺は宴会に行くのも気が進まない、だからこうしている

「♪~~~~」

「相変わらず、いい音色してんな」

誰がなんと言おうと俺は雇われの身、金さえ遣せば誰にでも従うのが傭兵だ。まだ信用していない奴らも居るだろうし、俺本人でさえこの先の事なんて考えもしていない、それなら何時裏切るかもしれない奴とは酒を酌み交わしたくないだろう。

・
・
・

くアニアく

彼女は宴会が行われている、大広間である人物を探していた

「ねえレキ、エルドさんを見ませんでしたか？」

「そういえば、見ませんね、スクレイド、アイツは何所に居るんだ？」

「俺に聞くのかよ、エルドはここには居ないと思うぞ、昼の一件以降は見えてないし」

え？見ていない？

「まさか、エルドさんは何所かお怪我をされたのでは！？」

「それは無いと思うんですが、一応、念の為に行ってみますか？」

「ええ、そうしましょう」

「俺も行きます」

三人は大騒ぎになっている宴会場から出て行った・・・

え？何この音・・・

彼女の耳には微かながらも何かの音が聞こえてきた・・・

「何か聞こえませんか？」

「確かに、微かにですが、何所からか何かの音がしますね」

「その音はエルドの部屋からじゃないか？」

「そうかもしれませんね」

・
・
・

「本当ですね、これは・・・ギターでしょうか」

「そうですね、心が落ち着きます」

「綺麗な音色ですね」

三人はエルドの部屋のドアに耳を当てて聞いていた

「この音色、何所となく、寂しそうです」

「それだけエルドが悲しい人生を送ってきたからだと思いますよ」

「アイツなら人を見下しそうなんだが」

三人は彼にばれないように、小さな声でひそひそしゃべっていた・・・
・が

「エルドさんはそんなことしなと思います！」

やってしまった・・・彼女は声を張り上げていってしまった

「だれかそこに居るのか？」

完璧にいまのは気づかれた・・・

・
・
・

（エルド）

「エルドさんはそんなことしなと思います！」
ん？誰だ？

「だれかそこに居るのか？」

ガチャ・・・はい？

そこには・・・姫様とスクレイド、それにレキさんまで・・・

「姫様と騎士団の隊長二人が盗み聞きってのはどうかと思うんです

けど」

「それはー・・・そのー」

「エルドが心配で見に来てやったんだよ」

「そ、そうよ、宴会にも顔を出さず、何をしているかと思えば、のん気にギターなんて弾き追^いって」

「悪かったな、ギターなんて弾いてて」

今は一人にしてほしい・・・そう言ってもいないが、彼の顔にそう出ていた

「悪い事はないんだが」

「宴会に出ると」

「そういうことよ」

「残念だが、俺はそういう性分じゃない」

「で、ですが」

「姫様、お心使いはとても嬉しいのですが、聞いたでしょ、俺の音色、いい音を出したとしても、ただ単に寂しく聞こえるだけ音にしかならないのですよ、そんな音を出す奴が宴会に出る資格はないですよ」

俺は結局、孤独・・・孤独なんだ・・・人からは好かれず、形だけを作ろうとしているに違いない

「それじゃあ、エルドさんのギターを聞かせてください」

「え？」

俺のギターを？こんな悲しげな音をしているのに！？

「エルドさんの音色は綺麗ですよ、寂しくなんて聞こえませんが、エルドさんが弾くギターは綺麗な音色ですよ、貴方は優しい人です」

「そうだぜ！エルド、お前はもう俺たちの仲間だ」

「お前が他人を思っていることはよく分かった」

「エルドさんの過去は知りませんが、エルドさんは私たちの大切な仲間です！」

ドクン！槍が心臓に刺さるような強い衝撃が走った・・・俺が優しい、俺の音色が綺麗・・・そんなの、あいつ等が言うてく

れたきりだよな・・・

「あり、が、とう・・・ありがとう」「」「え?」「」

「そんなことを言われたのは二回目かな・・・ありがとう、本当にありがとう」

「それじゃあ、大広間に戻りましょうよ」

「姫様、それは少し遅いですよ、そろそろ皆は地べたでへばって寝てると思いますよ」

「そうなの!?!」

「毎度のオチですよ、姫様」

「せっかくの宴会を・・・」

「それじゃあ、俺がまたギターを弾きましよう、今度はとっておきのを」

「ほんとですか!?!」「それは楽しみだな」「いいもん聞かせてくれよ」

「もちろん・・・それじゃあ・・・」

♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~

彼の魔力が音に乗って奏でるコーラス・・・それはさっきとは違う気がする・・・何所となくだが暖かい・・・

満月の夜、とある城では夜遅くまで綺麗な音色が響き渡り、一人の男の心が大きく動いた日でもあった・・・

彼は今、この時を幸せに感じ、その時を心に刻むのだった・・・

（仲間か……………そんな言葉、何時以来だろうな……………多分、学生時代以来かな）

第四話 満月の夜に響き渡る音色（後書き）

どうだったでしょうか・・・

最後はロマンチックに締めたかった作者でした・・・

それで本編ができますよ～

誤字があれば教えてください！

第五話 魔弾の決断と少女の決意

あの一夜の翌日の事だ・・・

コンコン、俺は今、自分の部屋に居る・・・

（やべっ！バンダナし忘れるとことだった）

実は、このバンダナはただのバンダナではなく、特殊な力が施されたバンダナで、俺の魔力をある程度まで抑えてくれる代物である・・・元々、魔力の制御が下手な俺は力加減をできなかったり、魔力の暴走で意識も無く、魔力切れになるまで暴走したこともある、今はある程度まで制御が利くが、まだまだ魔力が言うことが聞かないのが現状で、バンダナが無くても魔力制御ができるようにもう一つだけ武器としても扱える魔装具を持っている・・・とは言え、このバンダナは俺のトレードマークの様な物、いつも欠かさず身に着けている・・・とはいえ、何枚か同じものを持っているのだが・・・エルドは青色のバンダナをギュッと縛り、ドアを開けた・・・

「悪い、さっき起きたところか？」

そこにはスクレイドが居た・・・

彼はスクレイド、スクレイド・レメル・・・ユナリア軍の第四騎士団の隊長を務めている若い騎士だ、歳は俺とそう変わらないであろうに、騎士団の隊長という大きな仕事についているなんて、すごい奴だ。

彼には色々と善くしてもらっている・・・俺がここに居られるのも彼のおかげと言えるだろう。

いつか、彼には何かの形で恩返しをしたい

「いや、まだバンダナを付けてなかったただけだ、それより、どうした」

「ああ、朝食だから呼びに来たのと、その後に俺と一緒に軍議室に言って欲しい」

「分かった」

今、俺たちは朝食を済まし、軍議室に来ている

「朝早くから、軍議だなんてすみません」

そこには、親衛隊長のレキ・イヴェールと姫様ことアニア・ネールス・ユナリア・・・この城の主にして、俺の雇い主・・・まだ14歳という若さにも関わらず、彼女の父が倒れたことにより、現在は代理をしている・・・姫様はお優しい、そして信じやすい・・・お人好しなだけだろうが、彼女は彼女なりの魅力がある、それは人を引き付ける力だ、俺だけかもしれないが、あの優しさが人を救うこともあるのだと思う、できることならこの命がある限り、彼女を守り通してやりたいと思っている。

「我々は騎士の身、君主の命あらば、どんなこともいたしましょう」
そうスクレイドが答える・・・

「で、俺なんかがここに来ていいのか？少なくとも俺は雇われただけだぞ」

「それでも、私はエルドさんを信じていますから、それに・・・このお城には軍師がいらないですよ」

軍師がいらない・・・俺は軍師というものが軍を動かすのにどれだけ重要なのかは知らないが、凡その見当はつく、戦いにはどれだけ戦略が絡んでくるかは俺でも分かる・・・つまり、この城には戦況を読み、作戦を立て、それを指示するものがないということだ・・・
「とりあえず座ってください」

俺とスクレイドは椅子に座り、話を進めた

「だが、俺は戦略なんてものは分からないぞ、それにこの兵力では精々時間稼ぎぐらいにしかない兵力しか残ってないはずだが」

「それは心配ない、先日センチナ学園に救援を出した」

レキがそう言った・・・センチナ学園・・・確かそんな名前をどこかで聞いた気がする・・・あ、昨日のあれか、そんかスクレイド

がそんなこと言ってた気がするな」

「それで、戦力の補充できるとでも言うのか」

「あの学園には精霊使いが居る、少なくとも数人は力になってくれるだろう」

「学園がそんなことするとはな・・・」

そんなの・・・生徒を預かる者の責任はないのかよ・・・

「情報では救援に来る者達は全員が異世界の者と聞いているのだが、それは本当か？」

異世界・・・もしかすると、アイツもその中に居るかもしれない・・・

「いや、正確には二人ほどがこの世界の者だそうだ」

「だが、その救援が来る前にこの城が落とされれば元も子もないぞ」

「まあ、確かにそうだが、いい策がある訳でもないし」

それは確かにそうだ、俺たちは戦うしか能が無い、ましてや作戦なんてものも思いつくわけでもない

「この城の周りは街、そして東には難所の精帝山に北には荒地だぞ、西から進軍してこればかなり時間が掛かるはずだ、それに一昨日で戦ったのは北の荒地に差し掛かった所だ、補給を行っていてもあと5日のすればここに攻め入ってくるだろう」

東の難所・・・そして北の荒地・・・そういえばここから東に進めば魔族の国があると言っていたな・・・

「なあ、東の難所を過ぎれば魔族の国なんだよな」

俺はスクレイドにそう問う

「ああ、今は帝国軍に・・・そうか！そういうことか」

「一体どういうことだ？」「そうです、説明してください」

姫様はともかく、レキさんは分かって欲しいところさのだが、まあいいでしょう

「それはだな、敵が北から攻めてくるのは確實って事が分かっている今、全兵力を北に向けて防御を固めるべきだとは思わないか？」

「確かにそうだが、それがどうした」

「つまりは、帝国軍はそれを狙ってるんだよ」

スクレイド、その台詞を取らないでくれ

「恐らくだが、ここに残る兵を北に守らせでもしたら東から攻めて来るんだよ」

「そうか！魔族国を抑えた今、難所だからといって攻めてこないということはないと言う事だな」

「その通り、どうしますか？姫様」

「救援が来るまで時間を稼ぐ事ははできませんか？」

「相手の進行の状況にもよるが、北の部隊と東の部隊は多分だが、攻撃するのは同時、あるいは先に攻撃を仕掛けた後にもう片方は攻撃を仕掛けてくるのどちらかだと思うぞ」

「エルド、お前って随分と詳しいな」

スクレイド、アンタはそれでも騎士か！俺みたいに単独行動が基本の俺と違ってお前は自分の部隊を持ってるんだからそれぐらいは考えろよ

「二つ部隊があるならそう考えるのが妥当だろうが」

「そうだとしても対抗策が分からない」

「それを考える為にここにきたんだろうが！」

おお！レキ、俺はその事をすっかり忘れていた！スクレイドに対するツツコミでようやく話の原点にもどることができたか・・・で、対抗策って・・・どうしよう

「エルドさん、何かいい考えはないでしょうか」

「無いな、少なくともスクレイドみたいな精霊使いとやらが後数人居ない限りは」

「それでしたら、わたs」「それはダメです」・・・はい」
「？？はい？この姫様、精霊使いだとしても？」

「姫様は精霊使い、しかも聖剣ライトナーガの契約者、つまりは敵は姫様を狙っていると言っても過言じゃないんですよ、そんな姫様を戦場になんて出せるわけがありません」

「そうです、スクレイドの言うとおり、魔族国がと倒れた今、魔剣

ダークロードは敵が所持していると言ってもいいでしょう・・・幸いな事にも、リニカ姫が今の契約者だからよかったものの」

魔剣・・・聖剣・・・そして精霊・・・今の戦力は風前の灯・・・精々時間稼ぎがやっと・・・セントリナ学園からの救援・・・東からの敵・・・北の敵・・・戦える手立て・・・命削りのアレ

「よし！一か八かの大勝負、この俺が一世一代のこの勝負に命を賭けて挑もうじゃないか！」

「は？」 「なにを言うかと思えば」 「エルドさんが！？」

「こんなことは絶対にしなくなかったが、この際だ！時間稼ぎの捨て駒にでもなろうじゃないか！」

また孤独の世界にのめり込みそうだった俺を・・・赤の他人の俺を・・・孤独の世界から救ってくれた恩人に、命を賭ける！人っ子一人守れないようじゃ魔弾の名が廃れる！

「エルド、お前には命を救われた・・・だが、次の戦いはそうはいかない、先日知り合ったばかりとはいえ、今は紛れも無い仲間だ！なのに、お前が捨て駒になるような事はさせない」

「同じく、私はお前と昨日であつたばかりだ、だがな、昨日のあの一件で分かったんだ、お前がこの城に必要なと言う事を」

「行かせません、私は・・・私は・・・私は、貴方の雇い主です！いえ、私は、この国・・・ユナリア国の王女、アニア・ネールス・ユナリア、貴方は自らを犠牲にしてまでこの国を守る必要はないのです！」

「ひ、姫様、いまなんと・・・」

「ですから！・・・あ・・・」

ポカーン、姫様は気づいた瞬間に口を開けたまま固まった・・・

「今のは・・・独立宣言・・・つまりは、今だった・・・ユナリア国が再興された・・・」

「へー、姫様って意外と大胆な人だったんだ・・・レーキさーん、とりあえず、ナドラ連合の方に独立宣言書を出したらー」

「そ、そうだな、今すぐにでも用意して送らせよう」

「ちがつ、い、今のは！」

「言い訳とは、随分と無責任なことで、一国の王女様になられたんだから、責任は持たないと」

「そうですよ、姫様」

「王女就任式は何時行います？」

「ま、待ってください！」

「「いまさら、取り消しはなしですよ」」

「う・・・分かりました・・・その代わり、就任式は戦いの後、こ
こ一体が落ち着いた頃に行います・・・ですから、その時はエルド
さんのその席に出席してください！」

「了解！なんとしても生き残って見せましょう！」

「だが、一体どうするつもりなんだ？」

レキさん、その言葉を待ってました！やっと話の方向が戻ってきま
したよ、本題に入ったと思ったたらすぐに脱線するんだもん

「それはだな、これを使う！」

エルドが取り出したのは変なメダルが付いたアクセサリ―

「何だそれは・・・」

「これは通称・・・モンスターボックス、と言いたい所だが、怪物
の倉庫と言った方がわかりやすいな」

「まさか、中からいきなりモンスターが出てくるとかと言うオチは
無しで頼むぞ」

「安心しろ、すべて魔装具だ・・・俺専用のな」

「「魔装具！？」」・・・魔装具ですか・・・」

あら・・・姫様だけ反応が随分と薄い・・・なんか悲しいな

「簡単に言えば、俺が今までに狩ってきた奴らの魔装具・・・生き
る魔装具だ」

「ほく、面白い代物だな」

レキさんがなんか、興味心身ですね

「この世界で言うところの精霊を封じ込めた魔装具と言った所か」

「元の世界ではこの魔装具を持っている奴も少なくは無かったかな、

そいつらの大抵はこの魔装具を魔装獣って呼ぶ奴らが多かったと思う」

「魔装獣ですか・・・」

姫様が何か深刻に考え込む・・・一体何を考えているのだろう、俺には皆目見当もつかない・・・

「なあ、エルド、お前はその魔装獣を使って本当に大丈夫なのか？」

「実際に戦ってみなけりゃ分からないな、それに俺はこの魔装獣を使うのは初めてなんだし、扱いには慣れて無くて文句は言えないな・・・それに、もう後が無いから安全性がどうのこうのと言っている暇は無い」

「それはそうだが」「一体何がお前をそこまで動かすんだか」

一体何が俺を動かすとかは考えたことなんて余り無かったな・・・それはおれでもわからないな

「俺には利益が無くても、あんた等には利益がある、その利益は後々に何らかの形で俺にその利益の分け前が回ってくる、そう考えれば今は無駄だと思っても後には意味があるように思える日が来ると思うよ」

「・・・分りました」

ゆっくりと、彼女は口を開き、そういった・・・透き通る綺麗な声で優しく言った・・・彼はその言葉を聴いた瞬間、どう思ったのだろうか、彼がどう思おうと何を願おうとは勝手だが、確かなことが一つあった・・・それは、長い長い戦いの幕開けの予兆であることだった

「「え？」」

「エルドさんのお力添えを心より歓迎と感謝いたします・・・ですが、エルドさんの出陣はセントリナ学園からの援軍がいらっしゃってからにいたします」

「わかりましたよ」

「それなら、いまこそ地の利を活かす時がきたってことだな」

「ここの地形は私たちよく知り尽くしている」

スクレイドとレキが話し始める・・・

「なら、時間稼ぎは騎士さん達に任せるとしますか」

「おお！任しておけ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8894s/>

双銃魔弾エルド

2011年10月8日09時01分発行